

一般演題抄録

I-1 血液検体からの *Bacillus cereus* の分離状況とタオルの取扱いに関する検討

○山本 絢子^{1,2} 春木 茂紀³ 近藤 潤¹ 糸賀 正道^{1,2}
木村 正彦¹ 藤田 絵理子¹ 井上 文緒¹ 齋藤 紀先^{1,2}
萱場 広之^{1,2}
(弘前大・医附属病院・検査部¹ 弘前大・院医・臨床検査医学²
弘前大・医学部医学科4年³)

【背景と目的】*Bacillus cereus* は環境に広く分布し、芽胞を形成すると熱に強く、殺菌されにくい。しばしば血液培養から検出されるが、多くの場合は検体採取時の汚染と判定される。しかし、抵抗力の減弱した患者では敗血症に至ることも知られ、その原因としてタオルなどの汚染リネンが指摘されている。

近年当院でも同菌による偽アウトブレイクを経験した。今回 *B. cereus* の血液培養陽性率とタオル管理の関連を探るべく、タオル汚染や、他院での同菌分離状況について検討した。

【方法】細菌分離情報を情報ネットワークに公開している北東北の基幹5病院について分析し、当院データと比較した。

【結果】使い捨てタオルを使用するか、あるいは自院で塩素消毒後洗濯している施設では *B. cereus* の血液培養検出率は1.5%に達しないが、委託業者の洗濯タオルを利用している施設では血液培養陽性率が7%を超えていた。タオルの衛生管理方法によって *B. cereus* の血液培養陽性率に差がみられ、汚染タオルによる清拭が検査材料の汚染につながることを示唆された。当院は洗濯タオル使用時の血液培養陽性率は4.2%であったが、全病棟で使い捨てタオルに変更後1件も陽性例は認められなかった。

次いで、医学系文献検索エンジン PubMed を用いて、キーワードを sepsis + nosocomial infection + 細菌名で検索した。ヒットした文献中、日本から発表された文献が占める割合をみると *B. cereus* (35.7%)、CNS (1.2%)、corynebacterium (5.0%)、*P. aeruginosa* (2.6%)、Streptococcus (2.5%)、*E. coli* (1.6%)、Serratia (5.4%)、MRSA (4.8%)、VRE (2.0%)、ESBL (1.0%)となり、*B. cereus* が突出して高かった。このことから本邦における病院タオルの取り扱いや清拭などの習慣が影響を与えていることも懸念された。

【結論】①病院におけるタオルの汚染は血液培養のコンタミネーションの原因となっていると考えられる。②感染症診療の精度向上および易感染患者の重症感染防止のためにも医療施設におけるタオルの衛生管理に注意を払う必要がある。

I-3 I型インターフェロン非依存的な STAT1 リン酸化における IKK α の役割の検討

○邢 飛 松宮朋穂 早狩 亮 吉田秀見 今泉忠淳
(弘前大・院医・脳血管病態学)

I-2 紫外線照射によるチタンおよびチタン合金の殺菌および抗菌効果

○板橋 泰斗¹ 小野 睦¹ 成田 浩司² 和田 簡一郎¹
田中 利弘¹ 熊谷 玄太郎¹ 山内 良太¹ 中根 明夫²
石橋 恭之¹
(弘前大・院医・整形¹ 弘前大・院医・感染生体防御学²)

I-4 トレハロース投与による脳内オートファジーの活性化と神経変性疾患への効果

○丹治 邦和、三木 康生、森 文秋、若林 孝一
(弘前大・院医・脳神経病理学講座)